児童・生徒の友人関係の排他性に関する研究

有　倉　巳　幸・乾　　丈　太*

（2006年10月17日　受理）

A Study of the Exclusivity of Relationships between Friends at school

YUKURA Miyuki・INUI Jyota

要　約

友人関係の排他性が児童・生徒の学級適応感や所属する仲間集団の適応感に及ぼす影響について検討した。本研究では，所属する仲間と一緒にいたいという感情レベルの排他性と，所属する排他的な規範の認知からとらえ，それぞれの得点を中央値により折半し，４群に分けて検討した。調査は，小学校５年から中学校２年生計275名を対象に実施した。結果は，次のとおりである。まず，女子の方が，男子より仲間集団が同じクラスにいる割合が高かった。次に，自分の所属する仲間集団の排他性が高いと感じている児童・生徒は，そうでない児童・生徒より学級適応感が低かった。さらに，自集団の排他性が高いと感じているが，排他的であることを求めていない群の児童・生徒は，４群の中で最も自集団の適応感が低かった。

キーワード：排他性，排他的規範の認知，学級適応感，自集団の適応感

【問題・目的】

本研究では，友人関係の親密さが示すもう一つの側面である排他性に着目し，その友人関係の排他的傾向について，検討を行うことを目的とする。

小学校高学年になると，友人関係に質的な変化が起こってくる。すなわち，特定の仲良しの友達を求めるようになり，集団の構造化が展開されてくる。彼らは緩やかで大きな集団で行動するよりも，少人数の仲良しの友だちと強く結びついて行動を共にすることを好むようになる（河合，1985）。また，この時期から同性の友人に対する親密度が高まる（Buhrmester & Furman, 1986）。それゆえ，友人関係がそれまで以上に，児童・生徒の学校での適応感に影響を及ぼすようになる。特に女子においては，この仲間集団の親密性が強くなる一方で，集団外の他者や集団を寄せ付けない強固な排他性を持つことが指摘されている（井上，1992）。そのため，集団内で起こっていることが集団外から見えにくくなり，もし，その中で対立やいじめが起こっていた場合，外にいる教師にとって対

* 鹿児島大学大学院教育学研究科（姶良町立建昌小学校教諭）

応が難しくなる。

三島（2003）は，この排他性を「自分の仲間であるか否かによって相手に対する態度を変えたり，自分の仲間と活動することに比べて，仲間以外の児童と活動することを楽しくはないと感じたりすること」と定義し，個人レベルと集団レベルの排他性を考慮した調査を行っている。

調査は，まず児童一人ひとりが排他性尺度に回答した。次に，担任教師が，普段，親しくしている子同士で集まって，先ほど，一人ひとりが行ったのと同様の質問にグループで回答するように指示を出して，グループごとに集まり相談して回答させ，個人の回答とグループの回答をひとまとめにして回収させた。また，調査を実施した学級の担任に児童一人ひとりの排他性およびインフォーマル集団ごとの排他性を評定させた。

その結果，１グループあたりのメンバーの数は，男子4.51人に対して，女子が3.43人と，女子の方が少ない結果を得ていた。また，排他性は，親和的・独占的かかわり因子と排除的・固定的かかわり因子に分かれ，前者は，女子の方が男子より有意に得点が高かった。このことから，女子が男子よりも少人数の排他的な集団を作る傾向があることが窺える。

さらに，各グループの個人得点の平均値とグループ得点との間に有意な正の相関が得られ，児童一人ひとりが自己評定した排他性は，その児童が所属する集団の排他性と関連することが明らかになった。この結果は，児童一人ひとりの排他性の高さが，集団の排他性の高さを構成していると考えることができる。なお，三島（2003）は教師評定においても，同様の結果を得ている。

このことは，排他的な集団に所属している児童は，その集団に所属している一人ひとりの排他的な感情から構成されているとも考えられるし，逆に，排他的な感情をもっている人々の集まりが排他的な集団であるとも言える。

ところで，こうした排他的な仲間集団に所属している児童・生徒は，果たして三島（2003）の結果が示すように，みな高い排他的な感情を持っているのであろうか。三島の結果は個人得点の平均とグループ得点の相関であるため，個人一人ひとりの排他性の高さがそのままグループの排他性の高さを構成しているわけではない。言い換えれば，ある児童の排他性が低くても，他のメンバーの排他性が極めて高ければ，その平均値は高くなるし，グループで話し合ったときも，排他性の低い児童の結果は，グループの排他性の高さに反映しないことが考えられる。その意味において，排他性は，三島が定義に示したように，その本人が感じるある種のまとまり感だけで理解するには十分でないと思われる。

また，教師から見ると，それが排他的な仲間集団であっても，児童・生徒は表面的にまとまっているだけかもしれない。三島（2004）はその例として，友人選択におけるビリヤード現象を挙げている。

ビリヤード現象とは，学級内の多くの児童・生徒が排他的な仲間集団を作ることが，そうした集団に属していない児童・生徒が，共に活動する中で仲間意識を感じ，否応なしに集団になってしまうことである。そこには，一人でいることを回避するという規範を強くもつ児童・生徒の存在が窺

え，一人でいることは，その規範から逸脱することであり，望ましくないことであると考えてしまうのかもしれない（大嶽・石田・吉田，2005）。

ビリヤード現象やひとりぼっち回避規範といったことを考えると，そこには，仕方なくまとまっているのだと思っている児童・生徒の存在が窺える。こうした児童・生徒の存在を考慮すると，今自分が所属している仲間集団の排他的な行動を，彼らはどのようにとらえているのか，つまり，所属集団の排他的な規範の認知を知ることは，児童・生徒の友人関係がもつ親密さの裏に潜む特徴の一端を明らかにできると思われる。

そこで，本研究では，三島（2003）の指摘する感情レベルの排他性と，排他的規範の認知という二つの側面からとらえ，これらが児童・生徒の適応感，特に，所属する友人集団と学級集団の二つの適応感に及ぼす影響を検討する。

調査仮説としては，次の四つを検討する。まず，自分の所属する仲間集団（以下，自集団）がどれくらい集団外の他者や集団を寄せ付けない強固な排他性規範をもっているのかが，その集団に属する児童・生徒の集団内外の適応感に影響を及ぼすであろう。つまり，自集団が強い排他性規範をもっていると考えている児童・生徒は，そうでない児童・生徒と比べると，自集団の存在や活動を高く評価するであろう。それは，外の集団である学級集団の存在や活動に対する低い評価の反映であると考えられる。このことから，自集団の排他性規範が強いと評価している児童・生徒は，そうでない児童・生徒より学級適応感が低くなることが予想される（仮説１）。併せて，集団内においては，自集団の規範が個人の欲求に制約を与えるため，その集団への適応感が低くなることが予想される（仮説２）。

次に，自集団内に所属している児童・生徒といつも一緒にいたいという欲求の強さは，その集団への愛着感，ひいては適応感を高めることが予想される（仮説３）。

ところで，自集団の排他性規範が強い場合，自集団に対する排他性欲求が強ければ問題ないが，もしその欲求が弱いとその集団に対する適応感は低いことが予想される（仮説４）。つまり，自分としては緩やかな仲間集団を期待しているにもかかわらず，集団が強い排他性規範をもっていることによって，ストレスが生じ，その集団への適応感が低くなることが考えられよう。

このことは，教師が外からその集団を観察していても，いつも一緒にいるので仲がよいと判断するが，実際はその集団で強いストレスを受けて，困っている児童・生徒がいることを示している。

なお，本研究では，実態把握をするために，自集団に属している人数およびクラス内にいるこの自集団の人数，これらの排他性規範，排他性欲求の男女差や学年差についても検討する。

【方法】

調査対象者と調査時期

調査は，2006年１月後半に鹿児島県内の小学校５・６年生，中学校１・２年生を対象に実施した。分析対象者は，小学校５年生が69名（男子38名・女子31名），６年生が62名（男子27名・女子35名），

中学校１年生が70名（男子34名・女子36名），中学校２年生が74名（男子42名・女子32名）の計275名（男子141名・女子135名）であった。なお，各指標において欠損値があったため，その都度，欠損値を抜いて，分析を行った。

使用した尺度項目

学級適応感尺度は，小泉（1995）の教育環境適応尺度Ⅱの一部を参考にして作成した。また，自集団適応感尺度は，学級適応感尺度の対象を学級ではなく自集団に置き換えて作成した。自集団の排他性認知尺度は，先行研究を踏まえて作成した。個人の排他性欲求は三島（2003）の尺度を使用した。いずれの尺度も「全く当てはまらない：１」から「とても当てはまる：５」までの５件法で回答を求めた。

質問紙は，学級適応感，自集団のサイズ（休み時間や昼休みにいつも一緒にいる人，自分を含む）とそのうちでクラス内にいる人数，自集団の排他性規範，自集団適応感，個人の排他性欲求の順に構成された。学級適応感以降の質問に対しては，児童・生徒の心情に配慮して，「次のページから，あなたの友だち関係についての質問になります。回答したくない人は回答をここでやめ，担任の先生の指示に従ってください」の一文を入れた。

調査手続き

調査に際しては，調査の１週間前に，保護者に調査への同意を求めるための文書を送付した。その上で，授業時間を利用して，担任を通じて，各クラスで実施した。

【結果・考察】

尺度の信頼性の検討

各尺度の平均および標準偏差をTableに示した。各尺度の信頼性を検討するために，α 係数を求めた。α 係数を低めている項目は除外した上で加算し，尺度得点を求めた。なお，どの尺度も.70以上あり，信頼性は十分であった。

Table　本研究で使用した尺度の基礎統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	ＳＤ	α
グループの人数	217	2	18	5.54	2.37	
グループ内の同じクラスの人数	217	1	11	4.30	1.92	
クラスの人数の割合	217	0.1	1	0.82	0.28	
排他性規範	254	10	41	21.66	5.70	0.71
排他性欲求	264	18	67	44.56	9.91	0.80
学級適応感	261	12	45	34.55	6.25	0.84
自集団適応感	266	17	45	39.01	5.98	0.88

Note.　欠損値があるため，度数は尺度ごとに異なっている。

男女差および学年差

仲間集団のサイズについて，男女差および学年差を示したのが，Fig.1である。クラス全員といった大人数を挙げた児童・生徒を省いて結果を求めた。性×学年の２要因分散分析を用いて検定したところ，学年の主効果が有意であり（$F_{(3,243)}$=3.49, p<.05），学年×性の交互作用傾向が見られた（$F_{(3,243)}$=2.31,. 5<p<.10）。男子は学年が上がるにつれて，集団サイズが大きくなっているが，女子は，６年生だけが最も大きくなっている。こうした結果が得られた理由としては，発達的な特徴もあろうが，それよりも，調査を行った学校がそれぞれ１校２クラスずつであったため，その学校やクラスの影響を受けたことが挙げられよう。

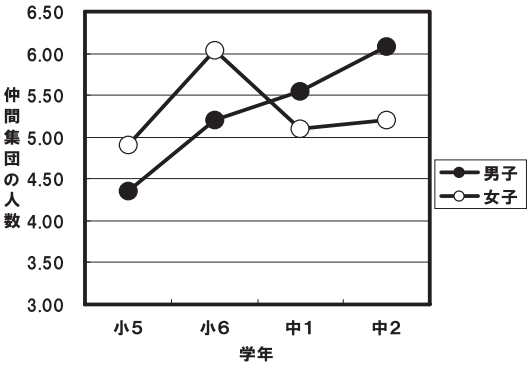

Fig.1　学年×性別比較（仲間集団の人数）

次に，仲間集団のうちでクラス内にいる人数も同様に検定したところ，学年，性の主効果（順に，$F_{(3,243)}$=9.15, p<.001；$F_{(1,243)}$=10.423, p<.001）および交互作用が有意（$F_{(3,243)}$=3.24, p<.05）であった（Fig.2）。三島（2003）とは異なり，女子（M=4.56）の方が，男子（M=4.01）より集団のサイズが大きかった。異なった主な理由としては，三島の方は実際に自発的に集まったグループの人数をカウントしていたのに対し，本研究では，一人ひとりの評価であることが考えられる。そのため，三島の方では，学級集団の人数による制約や，どのグループにも入らなかった児童への働きかけが影響しており，本研究では，個人の評価の歪みが影響しているであろう。

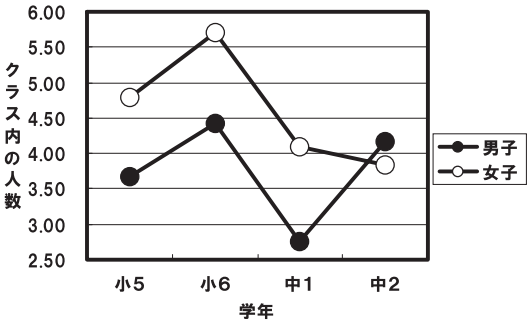

Fig.2　学年×性別比較（クラス内の人数）

ところで，Fig.1と併せてみると，全体的に女子は男子と比べて，クラス内で仲間集団を形成していることが窺われる。そこで，友人に占めるクラスの友人の比率を算出し，性×学年の２要因分散分析を行ったところ，性の主効果が有意であり，女子（M=.88）の方が男子（M=.75）よりクラス内に占める友人の割合が高かった（$F_{(1,242)}$15.00, p<.001）。このことから，女子は男子よりも排他的な友人関係をクラス内で作っていることが言える。Buhrmester（1996）は，男子は友人同士でスポーツや競争的ゲームなどを中心とした活動が多く，女子は，自己開示や親密性を重視した活動が多いことを指摘している。こうした活動性の違いも一因となって，必然的にクラス内に仲間が多くなるのであろう。

Fig.3には，排他性規範の強さの男女差，学年差を示した。平均値を見る限り，この規範は強いとは言えないが，分散分析を行ってみると，性の主効果が有意であり（$F_{(1,249)}$=11.31，p<.001），女子の方が男子より所属している集団の排他性規範が強いことが言える。

排他性欲求，つまり仲間集団と一緒にいたいという欲求については，性の主効果が有意であり（$F_{(1,258)}$=58.61，p<.001），女子の方が男子より強いことが示された（Fig.4）。また，交互作用は有意でなかったが，女子についてみると，中１が最も高くなっている。これは，もちろん，学校やクラスの影響も考えられようが，Fig.1～3と女子の結果の様相が異なっていることから，発達的な影響が結果に表れている可能性も考えられよう。

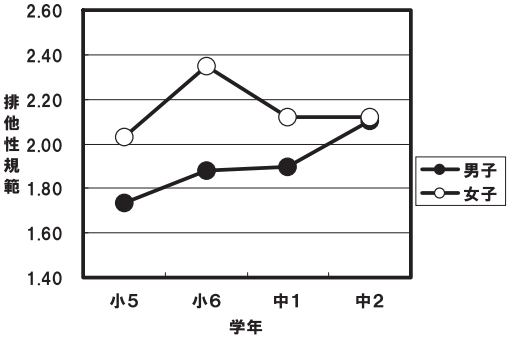

Fig.3　学年×性別比較（排他性規範）

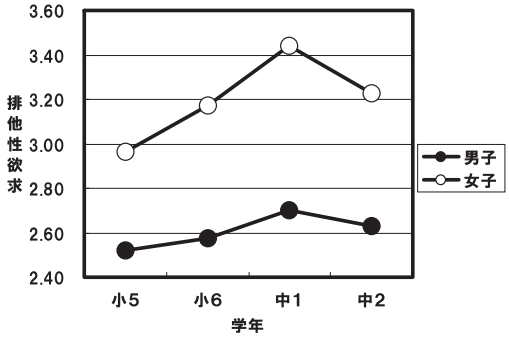

Fig.4　学年×性別比較（排他性欲求）

適応感に及ぼす排他性の影響

まず，学級適応感に及ぼす排他性規範と排他性欲求の影響を検討した（Fig.5）。分散分析の結果，排他性規範の主効果が有意であり（$F_{(1,235)}$= 8.19，p<.01），排他性規範の強い方が弱い方より，学級適応感が低かった（仮説１を支持）。自分の所属している仲間集団の排他性規範が強い方が，学級との間に壁を作ってしまうためか，学級適応感が低くなったと考えられる。

一方，自集団適応感においては，分散分析の結果，排他性規範（$F_{(1,244)}$=10.91，p<.001），排他性欲求（$F_{(1,244)}$=10.69，p<.001）の主効果および，交互作用（$F_{(1,244)}$=3.81，p=.05）が有意であった（仮説２，３を支持；Fig.6）。排他性規範の弱い仲間集団の方が，また，排他性欲求の強い児童・生徒の方が自分の所属している仲間集団に適応しているようである。加えて，予想したとおり，排他性規範の強い仲間集団にいながら排他性欲求の弱い児童・生徒が最も自集団適応感が低かった（仮説４を支持）。このことは，問題で挙げたように，一見すると一緒に活動している仲間でありながら，その中でストレスを感じ

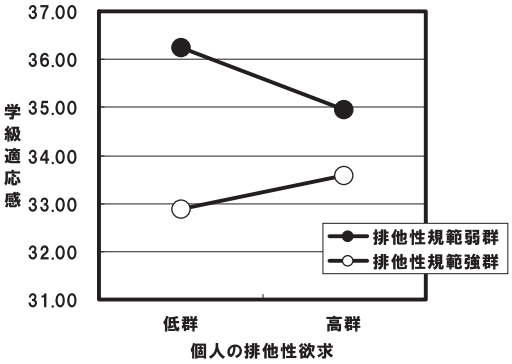

Fig.5　学級適応感に及ぼす排他性の影響

ながら過ごしている児童・生徒がいることを裏付けている結果である。

また，Fig.5の結果を併せて見ると，排他性規範の強い集団に所属し排他性欲求が低い児童・生徒は，学級適応感も最も低くなっていることにも注目する必要がある。自集団に適応できないが学級適応感も低いため，とりあえずこの仲間集団にいるといった消極的な理由をもつ児童・生徒が少なからずいることを示していると言えよう。

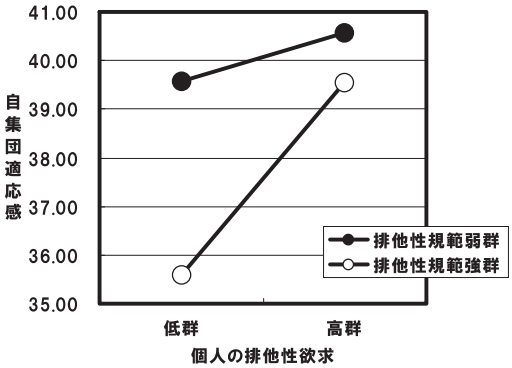

Fig.6　自集団適応感に及ぼす排他性の影響

最後に，本調査では，仲間関係についてというナイーブな問題を尋ねるために，不快な思いをしないようにと回答を本人に選択させた。しかし，予想以上に回答を止めた児童・生徒が少なかった。いつも一緒にいる友だちなんていないのに，回答を止めるということはそのことを自ら認めてしまっていることになる。それが本人たちのプライドを傷つけてしまうため，無理して回答した児童・生徒が少なからずいたのかもしれない。今後は，そうした子どもの気持ちを配慮していく必要があろう。

【引用文献】

Buhrmester, D. & Furman, W. 1986 The changing functions of friends in childhood : A neo-sullivanian perspective. In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds), *Friendship and social interaction*. Springer-Verlag.

Buhrmester, D. 1996 Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Hartup (Eds.), *The Company They Keep : Friendship in Childhood and Adolescence*. New York: Cambridge University Press. Pp.158-185.

井上健治　1992　人との関係の拡がり　木下芳子（編）対人関係と社会性の発達（新・児童心理学講座８）

河合芳文　1985　ソシオメトリー入門　みずうみ書房

小泉令三　1995　小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討　福岡教育大学紀要，**44**，295-303。

三島浩路　2003　小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究　生徒指導研究，**15**，51-56。

三島浩路　2004　友人関係における親密性と排他性－排他性に関連する問題を中心にして－　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），**51**，223-231。

大嶽さと子・石田靖彦・吉田俊和　2005　改訂版「ひとりぼっち回避規範」尺度の検討 日本グループ・ダイナミックス学会第52回発表論文集，154-155。